

ロッキー山脈「グランド ティートン峰」敗退記

～ おもしろふて、やがてかなしき ～

2013年6月～7月

山なかまシリウス 個人山行



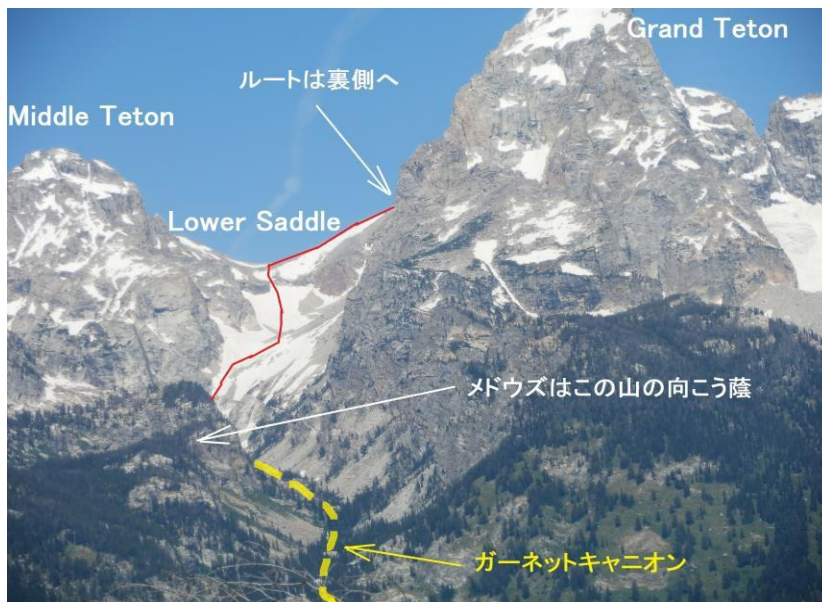
(Jackson Hole の Historic Place「モルモン教徒入植集落旧跡」からティートン連山核心部を望む。左より Nez Perce 峰 3606m[無雪]、ミドル・ティートン峰 3880m、グランド・ティートン峰 4172m、オーウェン峰 3917m。家屋はモルモン教徒倉庫旧跡。引用：WIKIPEDIA)

身体の芯が重くて足が前に出ない。頭も朦朧としてきた。あ～ア、コン畜生メ！！。リタイアをいつ相棒に申し出るか、今朝からアタマの中を駆け巡っていたのはそのことばかりであった。誠にもって情けない極み。涙がチョチョ切れて来らァ～。足がヘタリ込んで崩れてそうになってきた。これはもうイケナイ。こんな筈ではなかったが、やはり2年間の怪我療養のブランクが大きかったのか？

心優しい相棒の Dr. ナカミックは、「ヨッシ、左様か。それでは頂上は諦め、ローサドルまでの日帰り往復だけに切り替える。ザックから不要な物を全て出せ。必要最低限のクライミング装備だけにせよ」と即決のご判断。全く情けないことに相成ったが、やれやれ、これで助かった。

ここは、グランド・ティートン峰への入山ルートである急峻なガーネット・キャニオン(溪谷)を半日ほど登った所にあるメドウズというキャニオン最後の平地で、ここからグランド・ティートン峰山頂往復までは未だ2泊3日の行程が残っている。よって、今回の行程上ではまだほんのトバロといってよい。上を見上げるとローサドルまで延々と急な雪渓が繋がっていて気が遠くなりそうだ。ローサドルからアップサドル、更にグランド・ティートン峰山頂へのルートは尾根の陰に隠れて全く見えない。ここに残していく大半の荷物を岩陰にデポし、ハーネスを付けアイゼンを履いてクライミング装備と水、非常食、非常装備だけの軽荷を背負って雪渓を登り始めた。最初は比較的緩やかな雪渓であったコンケーヴな斜面は徐々に傾斜が増してきた上に雪も腐ってきて、滑落すればちょっとヤバイ状態になってきた。そういえば、昨日バックカントリーのキャンプ許可を取りに行ったレンジャーステーションで、先週末にこの付近で登山者が滑落しベルクシュルトに墜ち込んで死亡したと言っていたなア～。

早速ロープを出し、リードする相棒をスタンディング・アックス・ビレーで確保する。相棒はピッケルで慎重にステップを切りつつ上に消えた。相棒が見えなくなった途端、情けなさや悔しさを押さえていたタガが外れて涙が滴り、視界が霞んでしまった。マ、加齢で涙腺のゴムが弛んでしまっただけのことかも知れないが・・・。



(メドウズからローワーサドルまでのルート。後日山麓から望遠撮影)



(リードする相棒 Dr. ナカミック)

さて、この続きは後述するとして、暦を半年程前に戻す。

昨年の暮れのシリウスの忘年会で何となく海外登山の話題に及んだ時、来年はアメリカの国立公園巡りにでも行こうかという冗談が段々と真実味を帯びてきて、シリウス海外派のフルバさんの呼びかけで正月明けに何人かが集まって会合を持った。この中に、かつて半世紀近く前にコロラド州立大学に留学し、アメリカの国立公園は全て車を転がして廻ったというアメリカ通の Dr. ナカミックもいた。

最初はどこかの国立公園でトレッキングでもするかという程度であったのが、段々と熱を帯びてきて、どうせ行くなら全員で登頂したいということになって、マウント・レーニア、ヨセミテ、グランド・ティートン、マウント・ロッキーの各国立公園を投票に掛けてみるようになった。有名なヨセミテには意外に票が集まらず、マウント・レーニアが当選、知名度の低いグランド・ティートンが次点という結果となった。ヨセミテには単独でも歳を取ってからでも出掛けられるが、マウント・レーニアやグランド・ティートンには普通では行くチャンスが無いというのがその主な理由だった。また、フルバさんは昨年にマウント・レーニア登頂に挑戦したが、現地のガイド会社から 70 歳超という理由でガイド登山を断られ、泣く泣くマウント・ベイカーに転進した経緯もあった。また、小生もレーニアには死ぬまでに一度は登りたいと思っていたので、鋭意現地のレーニア国立公園局の公式 HP をチェックしたり、現地ガイド会社にメールで照会したりして情報を集めて登頂の可能性を検討した。

その結果、登るのに年齢制限は無いが、年間 1 万人の入山者のうち、我々の年代(70 歳近辺)の登山者はせいぜい数人~数十人以下ということであった。ガイド登山は既に 1 年前からの予約で満員になっていて申し込む余席がなく、ガイドレス登山では氷河上のルートファインディングやセルフレスキューに不安が残るという結論に達して、マウント・レーニアは残念ながら候補から外さざるを得なくなった。

さすれば、残るターゲットはグランド・ティートンとなる。現地の HP で山容の写真などを見ると、レーニアに比べて残雪の量が少ない上に、氷河上にはセラック、クレバスなどの類も無く、岩場さえこなせられれば何とかなるといった印象を受けた。ゴツゴツして屹立した巨大な岩壁の山容がトリガーとなった。また、この山の名前がフランス語のスラングで「デッカイおっぱいちゃん」というのもイカスではないか。この山麓には西部劇「シェーン、カムバック!!」の舞台となった町があり、今でもカーボーイやならず者や保安官が町のバーに屯して拳銃の抜き合いをやっているかも知れないではないか。

ここでも、ガイド登山も検討してみたが、我々ロートルはガイド登山のペースについて行けず早々とリタイア宣告を受けるであろうこと、高価なコストに見合った効果が期待できるかどうか疑問が残ること、米国の慣例でガイド登山参加には技術スクール受講が条件であるので、これに要する日数(通例 2

日間)が短期間の滞米中に捻り出せそうにないこと、などの理由からガイド登山は棄却しガイドレスで何とかしようということになった。現地のガイドブックをアマゾンに大量に注文し、また現地国立公園局のHP、レンジャーステーションのHP、海外の山岳会などのHPを片っ端から乱読(廻らない頭で英語に苦勞しながら)、ユーチューブに載っているティートン・クライミングのビデオの分からない英語に耳を傾けつつ、大体の感触は掴めた。

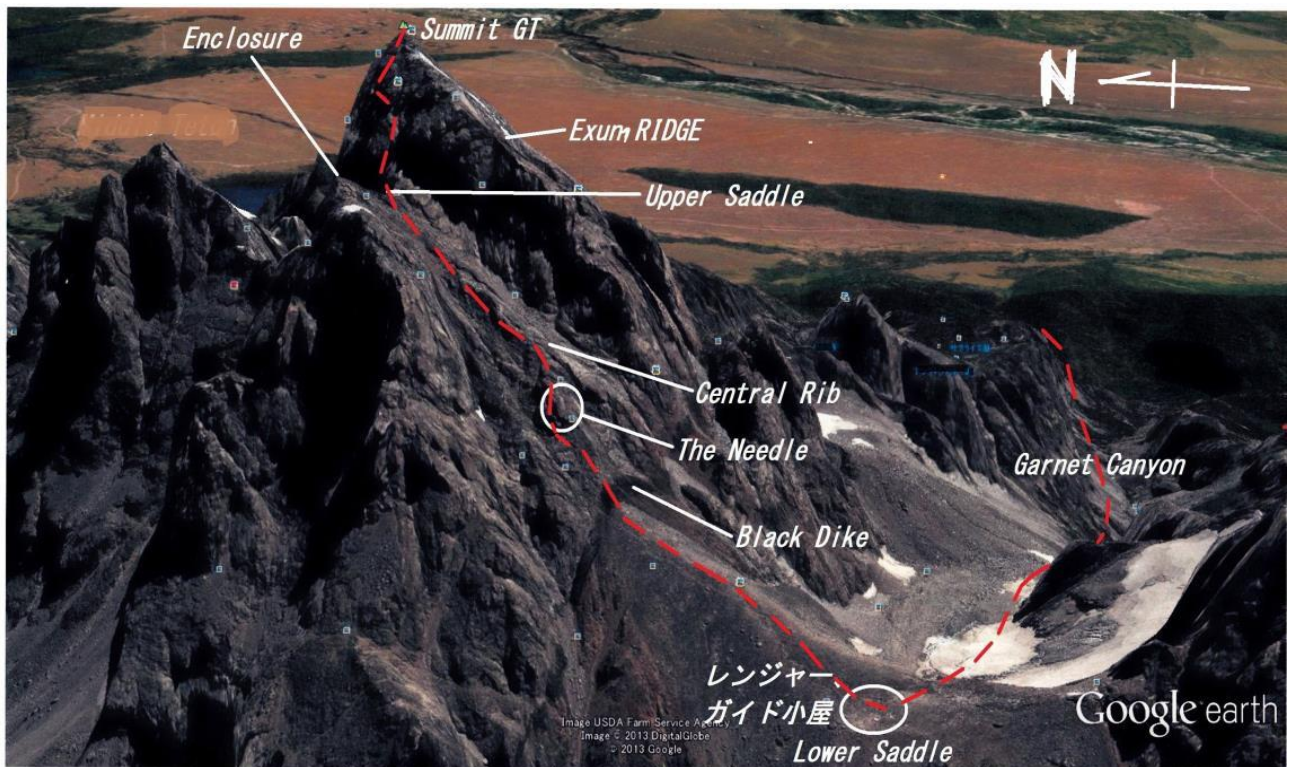
その結果、我々でもガイドレスで登れそうな山を幾つか選んで皆で検討した。しかし、我々の興味を引いた山は、滞在の予定時期が6月下旬～7月初旬というシーズン開始直後ということもあって、未だ残雪や氷結箇所が多く、ロープ確保が必要になりそうな箇所が沢山ありそうだった。パーティー構成は1名の初心者を除き他はクライミングの経験者ではあったが、日本のゲレンデと違ってボルト支点などという野暮なモノは全く無いので、いきおい雪渓ではスノーバー、岩場ではカムデバイスやナッツなどでの支点作成が必要になり、ちょっとこれでは全員が登るというのは困難と思われた。また、ガイドブックではアメリカ人の元気な若者兼ベテランクライマーを基準にしてコースタイムや難易度が記載されていて、最初は「こいつは簡単なルートではないか。我々には片目のケンケンだワイ」と楽観視されていたルートが、実はガイドブックや現物の登攀記録、登攀ビデオなどを検討している内に、難物の本性を顕わしてきた。そのようなことから、ティートン連山の10座以上を秤に掛けてみたが、結局は我々全員が登れると思われる山はハイキング用の前衛峰の二三を除いては全て霧消してしまった。

そのような訳で、「全員の山」は、幾つかのキャニオンを繋いでティートン連山をグルッと一周するトレイルのコースとし、全員登頂の山としてはルート途中にあるスタティック・ピーク(3425m、日本流に言えばさしずめ「雷電峰」か?)に登るという2泊3日のトレッキング計画を捻り出し、グランド・ティートン峰の登頂はDr.ナカミックとノリオさん及び小生の3人で遠征の後半に行うことにした。ルートは一番ポピュラーなOwen-Spaldingを選んだ。一番ポピュラーと言ってもアッパーサドルから上部ではアンザイレンが必要であり、また、ルート上にはボルトなどは全く無いのでカムデバイスやナッツ、或いはピナクルや岩角に長いシュリングを巻き付けてプロテクションやアンカーを作る必要があり、また帰路には40mの懸垂下降が必要な壁が1箇所あるので、ロープ操作も含めて結構時間が掛かるルートである。

現地のガイドブックではヨセミテ・デシマル 5.4、一部 5.6 と記載されており、一見易しそうなルートと思われたが、実はアメリカでのグレードのレーティングは同じ値のグレードであっても、日本でのそれに置き直すと+0.2 くらいは難易度が高いので、日本の感覚では 5.6、一部 5.8 と考えなくてはならない。また、ルートが氷結していれば更に難度が上がることになる。そのうえ日本の山と比べて山容が大きく巨大な壁が垂直に屹立しているので日本の壁の「箱庭」とは感覚が随分異なる訳である。高所恐怖が日本でのそれとは比較にならないくらい大きいのではなかろうか。従って、果たしてガイドレスで登れるのか、また我々は衣食住全てとロープ2本の他クライミングギアの全てを歩荷しなければならないので、ハイ・キャンプであるローサドルまでは各自のザックは25kg程度にはなると思われるが、果たしてこの歩荷に耐えられるかどうか全く自信は無かったが、エイ・ヤッで兎に角行ける所まで行こうということに決めた。

Owen-Spalding ルートの全容は次ページのとおりである。

(無雪期の衛星画像に筆者がルート、地名を記入。後方はジャクソンホール大草原と、湖はジェニー・レイク)。



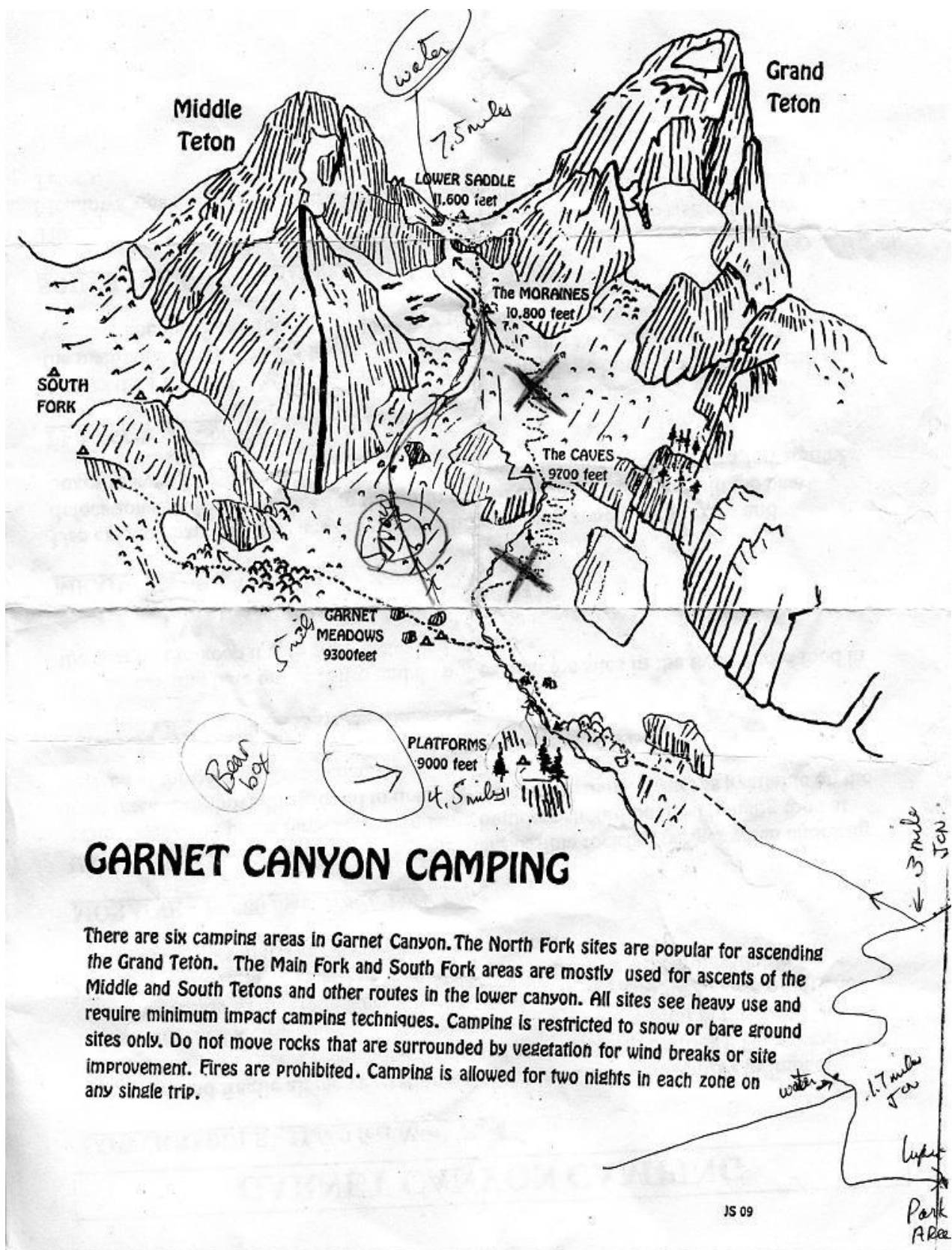
さて、現地に入ってみると意外に残雪が多く、「全員の山」のトレッキングコースも夏道が未だ残雪に隠れている状況で安全の確保に問題ありとして一周を断念し、コースの両端からキセル方式でそのトバロだけを齧ってみることしかできなかったのは残念であったが、それはそれで仕方がないことであった。

このキセル・トレッキングが済んで、いよいよグランド・ティートン主峰に迫る日程となった。ノリオさんはこの時点でドタキャン、結局 Dr. ナカミックと2人での挑戦となった。「全員の山」の帰途、Jenny Lake Ranger Station に立ち寄って残雪の状況や登山ルート聞いた時には、若いお兄さんのレンジャーは「Owen-Spalding ルート上に雪は無い。登頂は極めて easy である」とノタマッタ。これを聞

いた我々は大いに喜び勇んだ。次にファイルを持ってきて「これは昨日のルートの様子だ」とルートの写真を見せてくれたが、確かに写っている写真で見る限り全くの夏道であり、岩場にも雪は全く無かった。そして、今までに何パーティーくらい入山したかを聞くと、「非常に少ない。あっても2、3パーティーだが、その詳細は確認していない」とノタマツタ。ここに至って、これはどうもオカシイ、山麓から眺めたルート上の山肌には残雪がタツプリ貼りついており、どうもこの写真は時期が違ふようだ。ルート上に定点カメラが設置されている筈はないし、さすればこれらの写真は登山者が撮影してレンジャーステーションに提供したものであろうから“非常に少ない”登山者がそれも直近の写真を、しかもリアルタイムで提供することは考えにくいのではないか？さすれば、見せてくれた写真は昨年真夏のものに違いない。また、“雪が消えて非常に easy である”ならば、既にもっと沢山のパーティーが入山している筈ではなからうか。このことも怪しい。

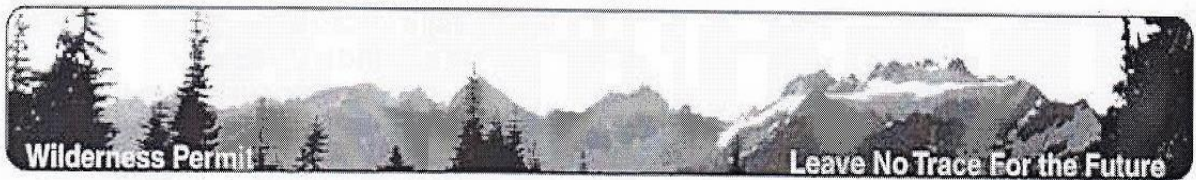
前々日にムースのビジターセンターにある別のレンジャーステーションにトレッキングルートの様子を聞きに行ったフルバさんの話では、今年は特に残雪が多いので、通常ならロープウェイで登れて観光客向けハイキングコースとなっている山(ジャクソンホール山岳リゾートの Cody Peak、3258m)も積雪で通行できないとのことだったから、標高がそれより 1000m も高いグランド・ティートンでは相当の残雪が残っている筈である。急にガッカリしてショボンとなり、それ以上突っ込む気力も失せた(実はそこまで突っ込む英語力も無かったというのが正確な表現である)。

翌日、グランド・ティートン登攀の宿泊予定地であるガーネットキャニオンのバックカントリー・キャンプグラウンドの使用許可を取りに再び Jenny Lake Ranger Station を訪れた。この時は如何にもベテランの感じがする年配のレンジャーが応対してくれて、Upper Saddle から上部の岩壁は全て雪が貼りついていて登攀不可能であること、3日前の6月25日には高標高地点では雪が降ったこと、メドウズからローワーサドルまでの間も残雪が多いので充分注意して登ること、夏道は未だ浮石や残雪が多くて危険であるので雪渓を登ることなどを、ガーネットキャニオンの詳細なルート図に鉛筆でルートを描き込みながら懇切丁寧に説明してくれた。また、先週末にはメドウズ付近の雪渓で滑落しベルクシュレントに墜ち込んだ登山者が1名死亡する遭難事故があったという。昨日のレンジャーの情報は怪しかったが、今日のレンジャーの情報は正確と思われた。入山したパーティーの数については、やはり“few”という回答であった。以下(次ページ&次々ページ)に参考までに、その時貰ったバックカントリー・ルート図及びキャンプ許可証を示しておく。



GARNET CANYON CAMPING

There are six camping areas in Garnet Canyon. The North Fork sites are popular for ascending the Grand Teton. The Main Fork and South Fork areas are mostly used for ascents of the Middle and South Teton and other routes in the lower canyon. All sites see heavy use and require minimum impact camping techniques. Camping is restricted to snow or bare ground sites only. Do not move rocks that are surrounded by vegetation for wind breaks or site improvement. Fires are prohibited. Camping is allowed for two nights in each zone on any single trip.



Permit Number: 58305
Date Issued: 6/27/13
Employee: jl
Issuing Office: Jenny Lake -Off Trial

Fee:
Group Size:

Entry Location: Lupine Meadows Trailhead
Exit Location: Lupine Meadows Trailhead

Visitor: Tadahika Ohtsuka
Tsujidon Fujisawa City
Kanazawa Pref
Japan

Date	Campsite/Resource	Night
6/28/13	Platforms	1
6/29/13	Lower Saddle	2

I understand that this permit is valid only for the campsites and dates listed. My group and I agree to abide by the rules and regulations of the National Park Service, and also agree to Leave No Trace.

Visitor's Signature

Issuing Ranger

Remarks: OS or XM
Permit by Geo

さて、以上の情報を我々が泊地としているジャクソン湖畔のシグナル山キャンプサイトに戻って検討し、Upper Saddle から上の核心部は積雪の為登攀不可能であろうから、行程を Upper Saddle までの往復に変更し、下記の行程で再計画を作った。重荷を考慮した超スローモーの計画である。

- ① 6月28日 Signal MTN Campsite⇒Lupine Meadows 登山口⇒Platforms Campground (幕営)
- ② 6月29日 Platforms Campground⇒Lower Saddle (幕営)
- ③ 6月30日 Lower Saddle から Upper Saddle 往復、Lower Saddle (幕営)
- ④ 7月1日 Lower Saddle から往路を下山

Upper Saddle より上で使用する予定の懸垂下降用2本目のロープやカムデバイスなどのギア類は持参しないことにしたが、それでも各自 23kg くらいになった。こんな重荷で果たして登れるのかいな？

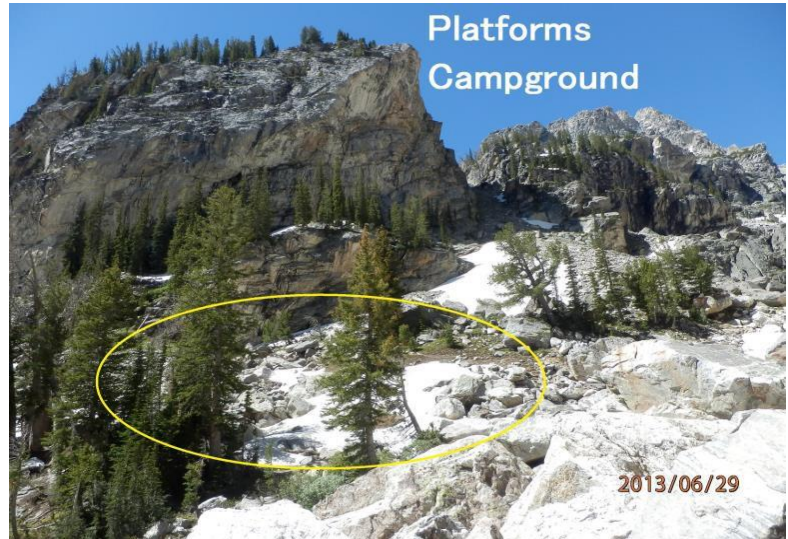
初日は、我がパーティーの女性陣の見送りと激励を受け、彼女たちが用意してくれたシリアルとコーヒー、バナナで朝食を済ませて暗いうちに Signal MTN Campsite を出発、Lupine Meadows 登山口にレンタカーを置き、明るんできた登山口を後に入山した。快適なペースでガーネット・キャニオン入口に到着、早くも午前10時半頃には本日の幕営指定地“プラットフォームズ・キャンプグラウンド”入口に着いた。こんなに早く到着するのならもっと上まで稼いで、本日の泊地をもっと上の“メドウズ”か更に上の“ケイブズ”か“モレーンズ”にしたいところであるが、前日の許可証取得時にレンジャーから「往路の幕営は指定されたサイトを厳守すること。復路は指定サイト以外でも黙認」と念を押されていたので、残念であるがここに幕営するしかない。

このサイトは溪谷の流れの対岸にあり、そのため急流の徒渉が必要になった。この辺りは巨大な岩がゴロゴロ転がっている場所であるから、徒渉点を探すのが容易ではない。徒渉ルートらしい踏み跡を辿ってみると、急流の最後の部分の流れが激しくてとても渡れそうにない。これでは万事休すである。「仕方ない。上のサイトに移ろうか」、「それは駄目だ。罰金を取られるだけならよいが、規則違反をした過度で訴追される」、「それでは、レンジャーが通りかかるのを待って、正式に変更して貰おうか」、「携帯でレンジャーステーションに変更依頼の電話を掛けたらどうか」(実はこの場所は携帯の圏外)、

「このような徒渉できないサイトのキャンプ許可を出したのはレンジャーステーション側のミスであ

る。よって我々には、正々堂々とサイトを無断で変更できる権利があるのではないか?」、「イヤ、それは理屈ではあるが、バレて追求されれば我々の負けとなって、罪を犯した者として合衆国の記録に残る」、云々カンヌン・・・。

対岸の様子を細かく観察していた Dr. ナカミックが少し上流に廻り込めば何とか徒渉できるかも知れないと偵察に出た。1時間ほど偵察していた彼は何とか渡れる地点を探し当てて戻って来た。大岩の間の急流をアップダウンして這って行くような大変なルートらしいが何とか渡れると言う。彼の是が非でも登りたい、登って見せるという気迫が徒渉点を発見したと言ってもよろしかろう。小生などは本性がエエコロ加減であるから、渡れないなら仕方がないで



(Platforms Campground)

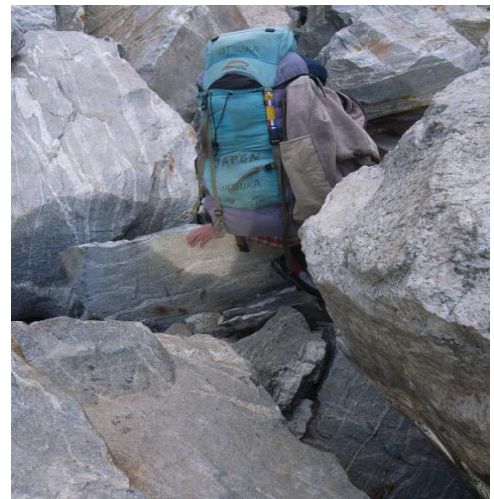
はないか。規則違反で記録が残るのは小生は構わないが、ナカミック氏のような元官界の著名人は困ることになるから、レンジャーが通り掛からなければ本件は中止して下山するのも仕方ないではないかと、別な誘惑と思惑(!?)も頭を擡げてきたのであった。

幅たった20m程の流れを渡るのに1時間近くも掛かった。幅1mにも満たないギャップを飛び越えるにもザックが重くて流されそうになった。やっと辿り着いたサイトは蚊の猛攻はあったが、裏の大岩に登ればジャクソンホール盆地の全景が眼下に鳥瞰できる素晴らしいサイトであった。

早速テントを張り、湯を沸かしてオカユもどきのシリアルの昼食を摂ると、後は何もすることが無くなった。ナカミック氏は持参したバーボンのお湯割りに舌鼓を打ちながらヒルネと洒落込んだ。



(キャンプサイト裏の大岩からジャクソンホール盆地を望む)

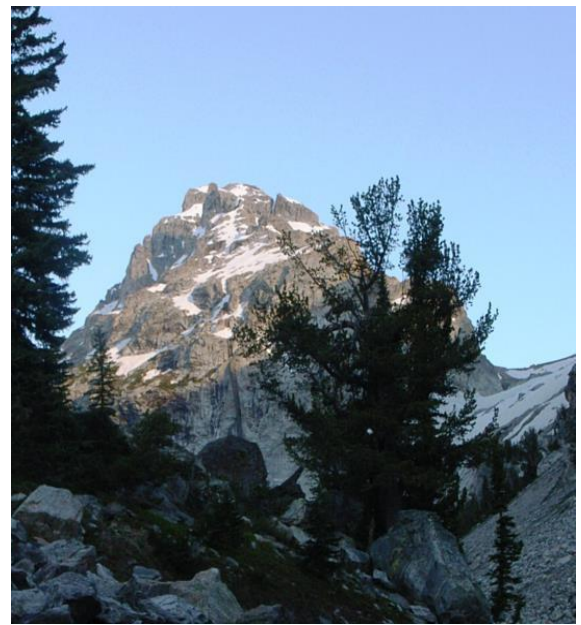


(大岩の間を徒渉する。足下には急流)

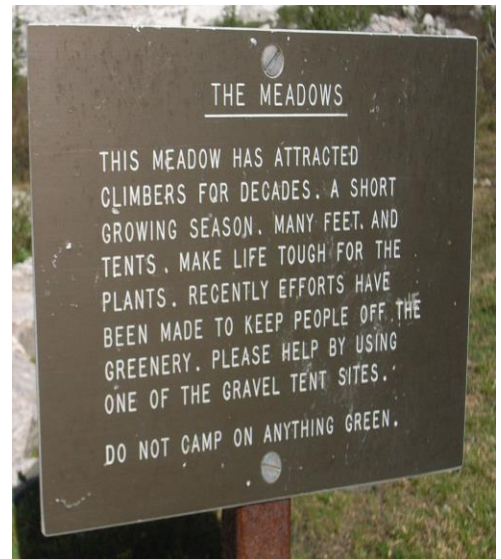
さて翌朝。流れを渡ってキャンプサイトから対岸のトレイル本道に戻るのにまたまた体力を使い果たしてしまって、意気が上がらない。昨日の快調とは雲泥の差である。2年前の1年間は腰椎骨折で山には行けず、また昨年は頸椎を骨折して2ヶ月間入院、その後自宅で静養していたので、この年も運動らしいものは全く何もできなかった。今年になってから少しづつ自宅の周りを歩けるようにはなったが、それはリハビリ中の散歩程度にしか過ぎなかった。そのような訳で体力が激減していた。それに渡米直前の大腸検査でイジリ廻された尻の具合が悪く、しょっちゅう岩陰に隠れなければならず、また下半身

にも力が入らなくなっていた。

何とか重荷を担いで2時間ばかり歩き、メドウズという草地に到着した。ここはグランド・ティートンやその南側のミドル・ティートン、サウス・ティートン、クラウドベール、ネスパース、東南側のディサポイントメント・ピーク(偽グランドティートン)などの壁から落ちる支沢が集まっている気持ちの良い平坦地で草地の真ん中をゆったりと流れが蛇行していた。此処がこのキャニオン最後の平坦地であり、ここから上には平地は無く、その殆どは急な雪溪に覆われていた。この長くて急な雪溪を見上げた途端、心身ともに萎えてきて、冒頭に書いたような情けないことになってしまった次第である。



(Platforms からのミドル・ティートン)



(Meadows Campground. 左はミドル・ティートン峰。右の大きな壁がグランド・ティートン峰の下部。

その間の鞍部がローサドル。右の標識は、テント設営は指定された礫地のみ可で、植生地には禁止の表示)

以下、冒頭の続きを続ける。

ロープを出してから急な雪溪をスタカットで4ピッチ登って多少平坦な雪溪に登り着いた。“モレーンズ”と呼ばれるミドル・ティートン氷河のモレーンの端にありキャンプ指定地になっているが、今は全て雪溪に覆われていた。小生はバテノ助三五郎になっていたのも全てのピッチをナカミック氏がリードし、小生はビレー役に廻った。トップはピッケルでステップを大きく切りながら登るので結構な時間が掛かり、スタンディング・アックス・ビレーのピッケルを踏みつけている足が痺れてきてマイッタ。マア、このような苦労はトップのステップ・カッティングに比べれば何程のモノでもかったが・・・。

雪が腐っているので、スタンディング・アックス・ビレー用に打ち込んだピッケルの利きが非常に悪い。トップは15mおきくらいにスノーバーでプロテクションをセットしながら登って行くが、万が一ランナウトした地点で滑落すれば小生がピッケルで作った確保支点が跳ね飛ばされる危険性大で、彼の滑落を停止できるかどうか心元ない。岩角にシュリングを巻き付けてアンカーを作りたいのだが、岩の形状が△型でシュリングがスッポ抜けて用をなさない。そのため、益々ピッケルの頭を踏みつける足に力を込めるので、足が痺れ挙句の果てに痙攣してくる。ア～ア、マイッタなあ～、神様、仏様。

そのような無駄な力を使っていたので上部の比較的フラットな“モレーンズ”に辿り着いた時には、空身でもそこから上のローサドルまで登り着ける余力は残っていなかった。大腸カメラで下腹部をイジラれた為か、情けないことに、下半身に全く力が入らなくなっていた。



(Medows 上部の雪溪の様子 2 葉。傾斜は緩やかに見えるが非常に急であった)

このまま無理をすれば、下山の体力が無くなって途中ビヴァークの危険性も出てくるし、場合によっては急な雪溪やガラ場で足が縛れたりして滑落して骨折でもすればレンジャーステーションにエマージェンシーコールを掛けねばなくなる。そのような訳で小生はここで待つことにして、相棒独りでローサドルを往復して貰うことにした。ア～ア、全く情けなくて再び涙がチョチョ切れてきた。

相棒には、帰路の急雪溪ではビレーヤーも居ないからスノーバーを懸垂支点にして懸垂下降で下りるように、またスノーバーは、イザという場合には山の大原則である“Leave no trace”を無視して残置してきてよいことなどを伝えて彼を見送った。彼が見えなくなってから、岩陰に隠れて放心したように泣いた。涙が止まらなかった。

やがて今までピーカンであった空が一面黒雲に覆われ始めた。雨もパラパラと降ってきた。彼が目指したローサドルの上にも真っ黒な雲が



(ローサドルを目指して独りで登って行く相棒)

去来し、シャワーに見舞われているようだった。逃げ場が無い相棒はどうしているだろうか？やがて、ローサドルの下で雪溪を下って来る何人かの人影が見えだした。しかし彼らしい単独者は見えないようだった。段々心配になってきた。4人連れのアメリカ人が降りて来たので、単独の日本人を見掛けなかったかと聞くと、見たよ、後10分もすれば降りて来るだろうとの答えにホッと胸を撫で下ろしたものだ。降りて来た相棒の話では、右の岩稜帯を越えるルートでローサドルを目指したが、黒雲を見て怖くなり急遽下ってきたとのことだった。右の岩稜帯ルートは手強いルートで、強行していればどのような危険に遭遇したか分らないので黒雲は「天佑」であったと言っていた。

下山は往路に登った急雪溪は避け、ガイドが歩いていた雪溪際の夏道を下った（一般のトレイルではなく、ガイドが顧客を案内する時だけに通る夏道らしく、未だ一部残雪に覆われている箇所もあり、シ

ーズン初めの為か浮石が非常に多いガレ場であった。雪渓部分ではガイドは顧客をロープで確保していた)。急雪渓やゴロタ石やガレ場・ザレ場が連続する極めて歩きにくい長い急峻な下りだった。

往路で岩陰にデポしていた荷物をザックに詰めて、さて、どうしたものか、今日はメドウズにでもテントを張って下山は明日にするか、或いは頑張っ^てそのまま下ってしまうか、ちょっと悩んだ。

しかし、相棒もこのまま下りたいようだったし、小生も遅くなっても広々した我々がベースキャンプ、ジャクソン湖畔の Signal MTN Campsite のテントに寝られるならその方が良かったし、またそこではロッジの深夜バーも営業しているので、草臥れた体に冷たいビールでも注入してやりたかったので、もう少しの辛抱は何とかなるだろうと一気に下ることにした。重い足を引きずりながら Lupine Meadows 登山口まで降りるのに4時間を要した。長い長い下りだった。Lupine Meadows 登山口に着いたのは夕焼けが終って闇が迫っていた21時半であった。



(重い足を引きずりながら見たジャクソンホール盆地の夕景。湖はブラッドリー湖とタガート湖)

この日は15時間の歩行となった。レンタカーを転がして深夜の“我が家”に戻り、既に就寝していた“家人”を起こさないようにそっと抜け出して相棒の Dr. ナカミックと二人でロッジの深夜バーに行き、乾杯して“苦くて”美味しいビールを喉に流し込んだのだった。

相棒は小生の途中リタイアには全く触れることなく、頸椎骨折後1年にしては23kgのザックを15時間も担いで大変な健闘をしてくれた。登れなかったのは、時期が早すぎて残雪が多すぎたこと、我々がグランド・ティートンを軽く見過ぎて、諸般の調査・準備・心構えに若干の不備があったことなどによるものであって、小生の体調云々によるものではない。小生の復活ぶりを嬉しく思うと同時に、グランド・ティートン登攀と一緒にやれたことを心から感謝していると言った。それを聞いた小生はまた涙目になってきたが、それを誤魔化するためにジョッキを重ねたのであった。

地形図や現地ガイドブック等を購入して登路などの検討を開始してから半年間、「長い旅」はここで終わった。岩トレや雪氷トレの国内トレーニング山行7回を含め、6ヶ月間に亘って準備してきた行程が実際にはたった2日間で終わってしまったのであるが、これをあつけなかつた^{ゆめまぼろし}「夢幻」とみるべきか、或いは「凝縮」と見るべきか。

私の体調不良のために相棒の Dr. Nakamic に迷惑を掛けたことを改めてお詫びしたい。

今回の敗退は、私の体調不具合が最大の原因ではあったが、それ以外にも登攀時期が1～2週間早すぎたことが遠因であったかもしれない。時期をシーズン初めの6月下旬としたのは、7月になればキャ

ンプ場が混み合って確保できなくなるという理由からであった。7月になればキャンプ場が満員になることはそのとおりで、この選択はキャンプ場確保に関する限り正解であったが……。事実、渡米した直後の天候は夜間はかなり冷えて寒く、ダウンのアウトターを持参していなかった小生は急遽ジャクソンの町の登山用具店まで出掛けて購入したほどであったが、滞在5日目頃からは急に気温が上がり、帰国する頃の7月4日頃には山頂付近でも雪渓が殆ど消失した。下に対比写真を掲げる。



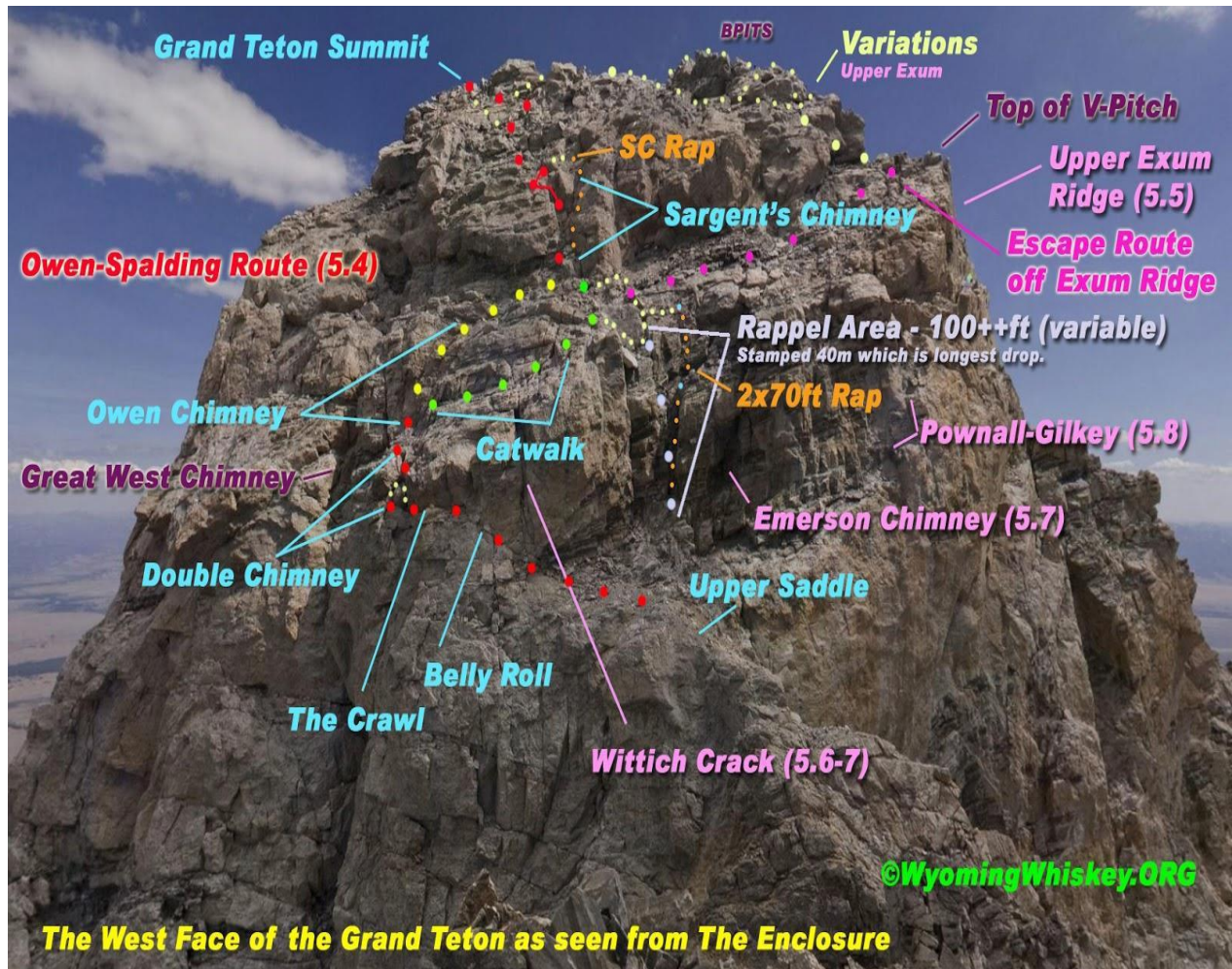
(撮影の方向が逆方向からになっているが、左は渡米直後の6月22日、右は帰国直後の7月9日のものである。右は現地 WebCam より引用したもので、残雪が全く消えている)

最後に、幻となった Lower Saddle~Upper Saddle、Upper Saddle~頂上間の岩壁の写真を以下に掲げて筆を折ることとする。写真はいずれも無雪期のものである。

【Lower Saddle~Upper Saddle】(Owen-Spalding Route:黄色実線、Summit Post.Org HP より引用)



【Upper Saddle～頂上間】(Wyoming Whiskey ORG HP より引用)



■相棒 Dr.ナカミックの山行報告は下記 HP に掲載されているので、参照願いたい。

<http://imayamahe.world.coocan.jp/>

補足(ご参考)

今後この山域の山行を計画される方のご参考までに、下記の参考情報を付記しておく。

【1】ルートの詳細、登山の計画、登山の詳細については、下記シリウス HP を参照されたい。

<http://www.yamanakama-sirius.org/>

- 「海外登山紀行」⇒「グランド・ティートン国立公園を歩く」⇒「1. 経緯・計画・経過」
⇒「資料3 『GT 登頂ルートについて』」
- 「2. スクランプリング」

【2】計画作成に当って参考にした現地ウェブサイト (主なサイトのみ)

- グランド・ティートン国立公園公式 HP <http://www.nps.gov/grte/index.htm>
- 同 ジェニーレイク・レンジャー・ブログ <http://tetonclimbingcanv.blogspot.jp/>
- Wyoming Whiskey HP <http://www.wyomingwhiskey.org/> (GT 山行記録が非常に充実)
- Mountain Project HP <http://www.mountainproject.com/>
- YOU TUBE <http://www.youtube.com/> (GT 登攀動画多数あり)
- Exum Mountain Guides <http://www.exumguides.com/> (現地ガイド会社)
- Jackson Hole Mountain Guides <http://www.jhmg.com/> (現地ガイド会社)

【3】参考文献、地形図

●ガイドブック

L.N.Ortenburger & R.G.Jackson. *A climber's Guide to the Teton Range, 3rd.ed.*

Seattle: The Monntainners, 1996.

Richard Rossiter. *Teton Classics 50 Selected Climbs in Grand Teton National Park.*

Guilford: Falcon Guide, 1994.

Richard Rossiter. *Best Climbs Grand Teton National Park.*

Guilford: Falcon Guide, 2012.

Katy Duffy & Darwin Wile. *Teton Trails.* Moose, Wyoming:

Grand Teton National History Association, 1999.

●地形図

Grand Teton National Park Wyoming, USA. Trails Illustrated Map, National Geographic

Grand Teton, WY (1:24,000) USGS US Topo 7.5-minute map. U.S. Geological Survey

(後者は米国地質調査所 USGS の HP より無償でダウンロード可。 <http://www.usgs.gov/>)



(Jackson Hole 大草原よりティートン連山。撮影=Dr. ナカミック)

(本稿 完)

[「遙かな山々 私の山旅・海外編」目次に戻る](#)